「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	2022 年　12 月　20 日
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏　名	八鍬聖

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

京都市動物園

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

動物福祉実習

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

2022 年　12 月 4 日　～　20XX 年　12 月 6 日　（3 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

京都市動物園生き物・学び・研究センター、主席研究員、山梨裕美氏

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

今回の実習では京都市動物園にて、主に動物の行動観察と、道具作成を通してエンリッチメントを行った。

●行動観察

私のグループでは 3 日間にわたり、アカゲザルの行動観察を行った。京都市動物園のアカゲザルは、元々展示されていたいわゆるサル山のような展示施設から、現在展示されている施設に引っ越してきたばかりであった。現在の施設は屋外のフィールドと屋内の部屋が繋がっており、サル山より暑さや寒さを凌げる構造となっている。引越し直後のアカゲザルはまず屋内の部屋に慣れるために屋外には出さずに屋内で飼われており、私たちが訪問した時点で、屋外に出すようになって 5 日目であった。そこで、サンプル間隔を 5 分毎に設定し、5 分経過時点でアカゲザル 12 個体がどこにいるのか行動観察を行った。記録した場所の例として、屋内の部屋や屋外のコンクリート、植物の生えている土壌などが挙げられた。観察 1 日目は、屋外に出てくる個体の数が少なく、屋外に出たとしても屋内と屋外をつなぐ梯子にとどまったり、そこから離れていないコンクリート上にいる姿がよく見られた。しかし、2 日目、3 日目になるにつれて屋外に出てくる個体の数が増加し、1 日目ではほとんど見られなかった土壌の上で長い時間過ごす姿も見られるようになった。また、屋外にあるジャングルジムのような場所で過ごす時間も非常に増えていることが分かった。3 日間というかなり短い期間での観察ではあったが、アカゲザルが次第に新しい環境に慣れていく様子を観察することができた。また、1 日目より 2 日目と 3 日目の方が、少し気温が高かったため、アカゲザルにとって屋外に出やすい環境になった可能性も考えられた。

また、この観察と並行して、5 分の間にどのような行動が見られたかの計測を行った。計測した行動の例として、移動(同じ時間に 10 秒以上とどまった後の移動のみ計測)や探索、採餌などが挙げられる。また、屋外施設での行動のみ計測した。1 日目は屋外に出てくる個体の数が少なかったため、2 日目３日目の方が計測できた行動は多くなった。今回の観察の結果で顕著であったのは、日が経つにつれて屋外施設に生えている植物を自分で採取して食べる姿が頻繁に見られるようになったことである。この理由としてはアカゲザルが次第に屋外の環境に順応していったことが考えられる。また、1 日目には見られなかった休息などの行動が 3 日目では見られるようになっていた。

短い期間でアカゲザルの行動様式が変化していく様子を見ることができて大変貴重な経験であった。また、以前見たサル山でのアカゲザルの様子と比較すると、新しい施設の方がアカゲザル本来の野生の姿をより引き出せているように感じた。屋外施設のあちこちを探索するようになったアカゲザルは非常に愛おしかった。

●エンリッチメント道具の作製

今回の実習ではエンリッチメント道具の作製も行った。私たちのグループが今回作製した道具は 2 つあり、一つはテンジクネズミ用につる植物を丸めて組み合わせて作った球状の道具であった。私はこれの作製にかなり手こずったが、同じグループの Magnus は非常に器用に、かなり速いスピードで作り上げていた。彼曰く幼い頃から森でこのようなものを作って遊んでいたらしい。少しだけノルウェーという異国の地での暮らしに思いを馳せてみたりした。

作製したもう一つの道具は、アカゲザルに餌をとる際に頭を使ってもらえることを願って作製した竹製の筒である。この筒にはいくつかの小さい穴がドリルで開けられており、そこからアカゲザルがこの筒の中に入れられた餌を取り出すことを想定した。実習期間中にこの道具が使われているところを見ることは出来なかったが、ただの置き物にならずにうまく有効活用されていくことを願うばかりである。
私が感動したのは、今回の道具作製で使用した素材は、動物園内に自生していた植物を自分たちで切るなどして得たものであることである。費用をかけずにエンリッチメント道具を作製することができるのは、動物園を運営していくにあたって、素晴らしいことだなと感じた。

3 日間総じて、動物園の裏側を見せて頂いたり、普段なかなかできないことを経験でき、とても貴重な時間であった。

ジャングルジムで過ごすアカゲザル

屋内と屋外を繋ぐ梯子で過ごすアカゲザル

指南を受けながら竹を切る様子

道具作り

６．その他（特記事項など）

本実習は PWS よりご支援いただきました。実習へのご支援感謝いたします。また、実習を受け入れてくださった山梨さんをはじめとする京都市動物園の皆様、実習を引率してくださった平田先生に深く感謝申し上げます。